

られているのを発見して、びっくりしたことを今でもはっきりと覚えている。拾数年前ドイツにいたとき、ある大学の医学部に留学していた日本人学生が、本を切りとったということで罪にとわれ、体刊を課されたことが新聞記事になり、留学生一同、図書館へ行くのに肩身のせまい思いをしたことがあったが、学生時代の経験とともに忘れられないこととして記憶にのこっている。

図書館に出入りしているうちに、いつとはなしに図書を大切にすることを覚えるようになったが、学生時代、夏休みの帰省中に、わが家の蔵書の整理を自らかって出たことがある。富士川游博士の集められた古医書が京大図書館に納められていることを教えられたことも、整理を思い立っ

た動機の一つであった。本草綱目などが並んでいるなかに、特に興味を覚えたもの何冊かを京都へ持ち帰ったが、戦災にもあわず今も手許に残っている。

寛政三年辛亥十一月（1791年）刊行の秘伝眼科全書とか、わが国における西洋眼科書翻訳の最初のものといわれている、文化十二年乙亥季春（1815年）と記された眼科新書などがあるが、何代前かの先祖がもとめてよんだものであろう。これらを読んでみると、先人の苦労のあとがしのばれるとともに、日本の眼科学のはじまりを見出すことが出来、誠に興味深いものがある。

京大図書館に初めて足をふみ入れてから三十年近くたつが、図書に親しむことを教えてもらったことを深く感謝している。

（医学部助教授）

社会科学関係統計資料の学内共同利用を

—経済学部調査資料室より—

細 川 元 雄

数年前、図書の極端な分散配置の現状と図書の専用化傾向を指摘し、図書館の近代化を提起された「京都大学附属図書館報告書」（66年刊）をみれば、今日の図書関係の問題点はあきらかにされていると思う。しかし現場の一資料担当者の当面する問題は、緊急かつ具体的である。経済学部調査資料室の一利用者の声（本誌第5巻第4号）に触発され、この欄を求め、周知の問題をあえて提起した。それは、社会科学関係の統計資料の共同利用を目的に関連部局および研究室間の交流を促進することである。

情報の大量化と研究教育の専門化とに対応しながら、各専門分野での情報管理室を目指している資料室では、絶えず検討を迫るさまざまな問題が生じている。その一つは統計資料であろう。わが国の政府統計に限っても、年間約479種^{（注）}あり、年鑑・要覧等、都道府県単位で出される統計を加えると膨大な量になる。さらに、外国のセンサス類の主要なものとなれば、その収集・整理に今より数倍の人員と予算をさかなければならない。専門研究の要請と人員・予

算の限界にともすれば無力感を抱くのも一資料屋ばかりではないと思う。学部図書室と分離して、経済の現状分析および統計の資料収集を中心に分担してきた当室でも、最近他部局との関係は密接になってきている。昨年10月を例に利用状況をみれば、学部教官・院生は32名、他部局者は14名、学生を含む閲覧者は39名であり、レファレンス状況（10～12月）は24件、うち学部外は11件を占めている。

「もっと専門化に踏切っては」、「いや、もっと広く収集を」。これらの声は、データ・センターやアーカイブの名とともに資料担当者に強く響いてきている。当面、学内の統計資料のすみやかな共同利用について、従来の相互貸借だけでなく、質的な意味を加えて考えてはどうかと思う。それは「調整された専門化方式」とでも言えよう。すでに自然科学関係では進行していると聞いている。また他大学の間で容易に進行しはじめている。学内の社会科学関係の統計利用者と資料担当者の話し合いがはじまってよいのではないか。

（注）中央官庁の昭和42年に実施した統計調査数。

（経済学部助手）